

會



報

1957年 7月

193

日本山岳會

ウエストン広
場の妃殿下

渡辺 公平

ウエストンさんの「ジャパニズ・アルプス」という本は不思議な本だ。妙に魅力のある本で、文字通りの古典的なのだが、僕にはいつ読んでも新鮮で、心のなかに香り高い山の大気を吹きこんでくれる。やはりウエストンという人が立派な登山家であつたからなのである。とにかく僕の愛読書の一つである。

だから毎年ウエストン祭が、山岳会信濃支部によつて催されることは非常に嬉しいのだが、そのくせ、いざとなるとなかなか時間の都合がつかず藤木さんのように毎年出席というわけにはいかない。

しかし、今年の第十一回ウエストン祭は、高山支部長がルームに來られての説明によると、従來と違つて松本市や地元の人たちと一緒にになり、上高地の山開きをかねて開催されるということでもあつたので、なんとかして出かけてみたいと思つてゐた。たまたま長野に用もあつた関係で六日の朝、八時二十五分松本着のバスに乗ることができた。

三十年振りで架けかえられた河童橋を渡り本部のある清水屋まで歩きながら、やはり上高地はいいなとしみじみ思つた。バスのターミナルも整備されたし、五千尺もおそろしく立派なしやれた建物に

變つたりして、かつての山男のメツカもいよいよ観光地に衣替えをしてきたようだが、それはそれでいいだろう。われわれ山仲間にはちよつとつきあひにくくなつてきたが、われわれはわれわれでまた行くところ、憩うところがないわけではない。現に今日のこの山の静けさはどうだ。ウエストン広場にはお昼だというのに人ツ子一人いないではないか。ウグイスのなっているこの梓川沿いのプロムナードにだつてほとんど人影をみるこゝろがないではないか。なにもあつてゐることはない。

ウエストンさんだつて今日の上高地にそう歎いてばかりはいられない今日どうななども考え、なんとなく今日のウエストン祭が楽しくなつてきた。

★

碑前祭は四時頃からという予定だつたが、秩父宮妃殿下のお着きになるのが少し遅れたため五時すぎに延びた。三百人近い登山者がレリーフの前に行儀よく集つてお待ちしていたが誰も文句をいうものもなかつた。皆妃殿下の出席して下さることが嬉しかつたからだろう。やがて、妃殿下がお着きになつた。拍手で皆がお迎え申し上げた。妃殿下はブドウ色のツーピースに純白のカーディガンを召されナイロンのキャラバン・シューズという優秀な装備、早速ウエストンさんの前に山の花を捧げられた。コバケソウ、キヌガサソウ、シナノキンバイという組合せで、誰かが西穂から採つてきたのだと聞いた。村井女史も挨拶のなかで述べたが、今日のウエストン祭は

どウエストンさんが嬉しく思つた日はないであらう。

式が終つて故殿下に黙禱を捧げたら妃殿下が挨拶された。それは簡単なご挨拶だつたが「山の宮様」としての故殿下のことを少しでも覚えてゐるわれわれ年配の者の胸を打つた。妃殿下は私もかつて（昭和八年）宮様とこの上高地に來、焼岳に登つたり、岳川を登つて途中から引返したことがあつた。この美しい自然をいつまでも損うことのないように残したいともいわれた。二十四年前のことを追想されるように話される妃殿下の横顔を眺めていたら涙が出てきた。もし宮様がご健在だつたら、今日あたりは妃殿下とお揃いでこのレリーフの前にお迎えすることができたであらう。そしたらウエストンさんどんなに喜んでくれるだろう……そんなことを考えたしたら、いよいよ涙が隠せなくなつてきた。

★

妃殿下は最後に悲しい遭難事件を防止するよう努めてほしいという言葉で挨拶を終られ、日高さんの妃殿下万歳で碑前祭は終つたが、まづすぐホテルに車で帰えられる予定を急に変更されて妃殿下はかつて宮様と歩かれた道を河童橋まで歩かれることになつた。道ばたに咲いてゐる小さな花にもしばしば歩みをとめられた。あいにく西穂から前穂への稜線には雨雲がかかつてゐたが、岳川谷を仰がれてはあの辺りまで登つたのかしらと日高さんや村井女史をかえりみて懐しそうに話されたりした。五千尺の前でお見送りしてから

折井君や石原監事と四、五人でお茶をのんでいたら、さつきから食堂の中でビールをのみながら独りでじつと山を眺めていた中年のアメリカ人が出てきて、さつきの人は秩父宮妃殿下だろう。プレツティ・プリンセスだとほめた。その通り、エーデルワイスの気品とコマクサの優美さをあわせもつたプリンスセスだといつてやろうと思つたが英語ではちよつといえそうもないので残念ながらよした。（三二・七・一〇）

ウエストン祭

第十一回ウエストン祭は七月六日午後五時から梓川畔、恒例の広場で開催。秩父宮妃殿下の御臨席を得た。今年は松本市をはじめ地元の後援もあり、東京からは日高副会長その他、未だかつてない多数の会員の参加があり、次のような順序によつて盛大裡に碑前祭を行うことが出来た。

▽開会の辞 高山支部長、祝辞

村井米子、山陰支部常務委員 佐野勇一

▽松本市長代理下条助役

▽故秩父宮殿下へ黙禱

▽秩父宮妃殿下の御挨拶

日高副会長の妃殿下万歳で会を閉じ、三百余名参会者の御見送りを受けて妃殿下は河童橋へ向われた。小憩の後七時から清水屋で講演会が行われ、渡辺公平、尾崎喜八、藤木九三諸氏の講演と上瀬貫一氏の南極のスタイルの上映。七日は昼頃から雨模様となつたが、支部塚本茂樹氏のリーダーで穂高を案内した。他一隊は上高地を道通した。

山の宮秩父御妃をゆくりなく迎え
まつれる十一回ウエストン祭

○ 妃の宮のみそばに近く参加者はお
おけなくも立つウエストン碑前

○ 岩山を雲過ぐるなり山の宮偲びて
われら皆黙禱す

ギャルツェンの礼状

五月六日横有恒氏宛シエルパの
ガルツェンから次の来信があつた。さきほど外務省に依頼して
送った在日当時に贈られた土産
品、それにシエルパ協会のバッ
ジ（毎日新聞社で作つてもらつた
もので、本会の寄贈になるもの
）などの礼状である。
貴方から送つて頂きました小包
は無事受領しました。非常に感謝
致しております。小包のすべての
品物は事故もなく無事に着致し、
私、妻、テンジンおよびわれわれ
シエルパ一同貴方のご親切を感謝
しております。

われわれの深い感謝の気持ちを
AC会員の皆様と毎日新聞社の皆
様にどうかよろしくお伝え下さる
よう。私の末子も大きくなつて歩
くようになりました。メダルとバ
ッジが出された時、テンジンをほ
じめわれわれシエルパ一同その非
常に素晴らしいをみて大変喜びま
した。われわれはメダルやバッジ
を分配する時には貴方に敬意を表
して盛大なパーティを開催する予
定です。松田さんが旅行から戻ら

穂高嶺を過ぎゆく雲も岳沢を下る
川瀬もしばししづまる

第十一回

ウエストン祭

塚田 孝治

山深く入りて来ましし妃の宮のお

れたと思います。松田、村山およ
び他のマナスルのメンバーの方
々に私の家族およびわれわれのバ
ーティのシエルパ一同からよろしく
とお伝え下さい。私はアルン溪谷
の雪男の探検からちようど帰つた
ところでです。九月には再び行きた
いと思つております。
どんな仕事でも私にお知らせ下
されれば他のパーティに参加する
前に貴方のお役に立つようになし
ます。いつでも私に便りを下さる時
にはシエルパ・クライマーズ協会
宛でなく小生の住所宛直接お便り
下さい。

ネパール・ヒマラ

ヤ調査の出版

こんどのマナスル登山隊の遠征
にあたり、一九五二年踏査隊の今
西錦司、中尾佐助両氏及び翌年の
第一次登山隊と同時にネパール入
りをした科学班の中尾、川喜多二
郎両氏の手によつて踏査観察採集
された資料は、京都大学生物誌研
究会が文部省科学研究所の援助を
得て調査研究にあたり、その成果
は木原均博士を編集者とし文部省

おみ心にさしぐまるるなり

○ 横さんも今ここにいまさばとのみ
思ひつつ今日の集いを心にきざむ

○ 黙禱の後のひと刻堪えざればあら
がわずして涙あふるるにまかす

○ うつりゆく世の様々に堪えゆかむ

研究成果刊行費の補助をうけて

1. Flora and Fauna of Nepal Himalaya.
2. Land and Crops of Nepal Himalaya.
3. Peoples of Nepal Himalaya.

の英文三巻一八四頁の大冊が逐
次刊行された。その発行者たる日
本學術振興会は最終巻の刊行を期
として、七月十一日神田学生会館
に調査研究関係者の外日本山岳会
毎日新聞社その他少数の人々を招
いて記念晩餐会を開かれ、本会か
らは前記諸君の外別宮会長、日高
松方両副会長及び横、三田、成瀬
小原、今西のマナスル登山隊員が
出席した。主人側高垣理事長の挨拶
につづき木原博士及び前記三氏の
簡単な報告に感謝ふかい報告と感
想談があり来賓の石黒忠篤、剣木
亨弘両参院議員その他のテーブル
スピーチがあつて盛会であつた。
第一巻はすでに横隊長からネパ
ール国王及びネパール印皮首相に贈
呈されたのであるが、既刊の二巻
についてはネパール開国後最初に
刊行された纏まつた学術報告書と
して欧米の学界に多大の反響を呼

心つつましくカメラに向う

○ たまきはる命に寄する哀みに幼児
のごとく眼を腫らしをり

○ 山に逢い山に別る友とおりのキヌ
ガサ草を清しと見つ

一九五七年七月六日

び起しているそうである。また採
集品のうちには植物の新種数十に
のぼり、標本は京都大学と科学博
物館に一揃いずつ保有する外、特
に倫敦博物館の懇望により余部を
同館に寄贈することになったとい
う。本会各員の業績が見事なかつ
て世界の学界に寄与するのはま
ことに愉快なことである。(S.H.)

スターリン峰登頂記

ベレーツキイ著
袋 一平訳

本書は一九三三年のアパラコ
フ等によるスターリン峰（七四九
五米）の初登頂と一九三七年の第
二登頂とが主な内容であるが、そ
れだけでなくレーニン峰などを含
むバミール山城へのソ連の探検及
び登山についても概説されている
から、ソ連邦の登山界の実状にう
といわれわれにとつては、非常に
便利である。著者のベレーツキイ
は一九三六年ゼルジンスキー峰
に、一九三七年八月レーニン峰に
登り、さらに同年九月スターリン
峰の登頂に成功した。一九五六年
には中共との合同隊をひきいてム

ズターグ・アータの初登頂を行

い、今年は北側からエヴェレスト
をうかがうというソ連第一線の登
山家。共産圏の山の本だからとい
つて特に珍らしい描写があるわけ
でもないが、科学アカデミー氷
河、赤軍氷河、革命峰などはわれ
われの耳目に親しみにくい。そう
した名称は国状の相違からやむを
えないとして我慢するにしても、
一九二八年のドイツ隊によるレー
ニン峰の初登頂を否定するような
記述（一五五―一六頁）は本書に書
かれた理由だけでは承認できない
ところである。

袋氏の訳文はなめらかで読み易
い。別刷地図を三葉も入れたこと
は写真や図版の比較的多いことと
共に読者に親切であるが、一頁大
の写真が一、二葉挿入されている
ら、さらに効果的であつたらう。
ソ連の山岳書の翻訳は今まで全
くなかったのだから、今後この種
のものを訳されるよう袋氏にお願
いしたい。
本書にも序文を書いているザト
ウロフスキーには「中央アジアの
山々」と題する天山支脈の探検史
を述べたかなり分厚い本があると
聞く。そうしたのもも邦訳され
ら便利であろうと思う。（望月）
一九五七年六月廿五日ベースボ
ールマガジン社発行、B6版二
四四頁写真地図多数、二九〇円

第一七六回小集会

第一七六回小集会は、六月二十
日午後六時から体協二階会議室で
開かれ、木下は雄氏の米國南極探
検隊の話および映画、平山善吉
氏の日本隊の映画が上映された。

ダージリン ①

—ヒマラヤの展望台—

三田 幸夫

今年の正月、或る山の雑誌に、「ダージリンの元旦」という一文を寄稿したが、その最後に、近い将来また是非訪ねてみたい、そしてその時は、マナスル以来の顔見しりのシエルパ達には何としても会いたいものだと思いたのを覚えていた。その希望が幸運にもこの三月に達せられることになった。

会社の用事で、セイロンからインドへ一カ月余りのあわただしい旅を終え、戦後二度目のカルカタに一週間程滞る余裕が出来た。その最後の幾日かを割くことが出来たらダージリンは是非訪ねてみようとは最初からの予定であった。朝の飛行機に乗れば遅い夕食はダージリンでとれるので、向うへ着いては万事都合が好いのだが、生憎、十日程先までその朝の便は予約済みで、一番近い六日の午後の便の座席を漸くブツクすることが出来た。

航空料金は、山麓のボグドグラまで往復約一万円。そこからダージリンまでの貸切自動車は往復約七千五百円。乗合自動車なら五分の一にもならないが、万一、乗りはぐれたらえらい目にあうので貸切を奮発したわけだ。後になって乗合でなくて良かったことが解った。

宿もマウント・エヴェレスト・

ホテルに、山の見えるバス付の独り部屋が予約出来た。宿賃は朝晩の二食付きで約二千六百円だからこれは、シーズン・オフとはいえない。近頃の日本のホテルに較べたら随分安いものと思われる。

友人の車で送ってくれるというのを辞退して、インド航空会社のバスで飛行場に向う。ダムダム空港はインドの東からの玄関口だけあっていつも仲々の雑と下ろである。その中でベンチに腰を下ろし一息しているとなにか見覚えのあるインド人がやつてきて声をかけられた。「ハロー！ ミスター・マキ」といつて手を差し伸べる。おや横さんと間違えられたなと思つて、私も彼が誰だつたか思い出さうと相手を見つめていくと、先方も漸く気がついたらしい。「やあ失礼、三田さんでした、暫く」ということで、改めて手を握り合つた。一九五三年のマナスル遠征の時、毎日新聞のカルカタ通信員として働いたダス君であつた。当時世話になった礼をいつうちにダージリン行が出るというアナウンスに腰を上げた。別れしなに、彼はもう一度日本の新聞の仕事をする非はしたい。貴君からも言葉添えを頼むと繰返していた。彼は現在或る大学の講師をやっているがU・Pの仕事をしているとのことであつた。

昨今はインド人も空の旅に慣れたと見え、ローカル線の御客さん達は皆軽装で、東京から大阪に飛ぶといった気安さに見える。も

つとも、今以て貧富の差の甚だしいインドのこととて、飛行機に乗る程の人は、相当金持階級に違いない。或は日本同様社用か御役人のたぐいが多いらしい。私も独り旅のレインコートとボストンバックだけという気軽さである。

飛行機は、三十人乗り乗れる双発で、客は十人程切り込まつた。が、驚いたことに、坐席の前半部にはソファや椅子その他の家具がぎつしり縄で結びつけられていた。金持かえらい役人の引越荷物らしく、操縦士と会社側の人の間に、なぜ人間の代りにそんなものを積んだのかと、一も二もやあつたが、不平顔の御客さん達も皆至つておとなしく、文句に同調することもない。後ろの席にそれぞれ納まつて、飛行機は定刻素直にベンガル川の北の空に向つて飛びつた。

ヒマラヤ登山鉄道

飛行便のなかつた頃、ダージリンへ行くには、カルカタのシアラダ・ステーションから夜行列車に乗り、翌朝ベンガル平原の尽きようとする山麓のシリグリ駅で登山鉄道に乗り換えるのが普通であつた。勿論、今では、時間に余裕があり、飛行機代を節約するつもりならこの汽車便を利用する人は相当あるだろう。しかしシリグリ駅からダージリンまでは、三十年も前から自動車を通うようになつた、登山鉄道を利用する観光客は割に少なくなつたようである。しかしながら、このヒマラヤの前山の旅は誠に楽しいものだ。私も今度の旅行で、是非久し振りにこの

汽車に乗つてみたかつたが、どうにも時間の余裕がなく、往復共自動車によらざるを得なかつたのは本当に残念であつた。しかしながら、この汽車は昔と殆んど変わらぬ可愛らしい姿で元気に山を登り下りしているのを見て甚だなつかしかつた。

夜行でシリグリ駅に到着くと、食堂で軽い朝食を済ませ、用心の好い人は夏服を合着に換へたりスエーターを重ねたりする。汽車が山を登つてゆくにつれて寒くなるからである。

玩具のような列車には貨車と一緒に一等、二等、三等車もついていて、上等の客車の方は欧米人か富裕なインド人達に占められていた。しかし、少しでもヒンズタニエでも解れば、下のクラスに現地人と相乗りする方が遙かに面白い旅が出来た。チベット人、ブータン人、ネパール人、等皆賑やかで愉快な話相手になる。

機関車も、須田町鉄道博物館にある明治初年のあれと同じ位の大きさで、しかしピカピカ磨き立てられた美しい玩具のような車だ。それでも、客車、貨車を七八輛もひびつて、シリグリを出外れた未だベンガル平原の渾ての林の中を威勢よく走つてゆく。そして五六時間もかかつて六千呎許り登るのだ。

小一時間として列車は坂道にかかつてくる。道が急になるに従つて、スウィッチ・バックを繰返し或は円を描いてループ式になる。その頃が、この汽車が活躍する最高潮の時だ。カーブ毎に機関車は谷にこだまする鋭い汽笛を吹き鳴

らし、ポツポツと息を切らして登る。火夫は半身を車からはみ出しながら石灰の塊りを忙がし相に金鎗で碎いてはシャベルで釜にはうり込んでいる。

汽関車がそんなに精を出し、頑張っているのに、客車の原地人の御客さん達は至極のんびりと、後から追抜いてゆく自動車や、展開してゆく深い谷や、遙かな山々の景色仲には至つて無関心に、賑やかな仲間達の世間話に興じている。部落や停車場に近いカーブでは、子供達が群がって列車の脇を駆けながら車窓の客に「ボックシス！ ボックシス！（心付の意）」と小銭をせがむ。そして見向きもしない乗客の態度に落胆もせず、近道の坂を駆け登り、列車の先廻りを走してはまた「ボックシス！」を繰返す。まことにのんびりしたほほえましい風景である。

そうしてこの列車は深い谷の横腹を縫いながら千呎、二千呎と高度を上げ、幾つかの停車場に停まり、その都度水を腹一杯呑んでは息を継いで登り続ける。

列車はやがて有名な避暑地、四八六呎のカートシオン駅に着く。山腹には美しい住宅が点在し、茶畑が一面に見られる。ダージリン茶の栽培が此の辺から始まる。また、今まで沿線に茂つていたかしわ、クリの樹林の中にくるみ、月桂樹、たいざんぼく、もくれん、しやくなげ等が眼につく。それに大分昔日本から移植したという杉が立派な大木になつていてのが各所に見られる。春や夏の頃だと、この辺から色々な種類の野生の菊や、豪華なしやくなげの花が旅客

の眼を楽しませてくれる。

ここから更に十数哩登つて列車は遂にこの鉄道の最高地点ダーム駅（七四〇七呎）に辿り着く。眼界は急に開け、西の方にシンガラ山脈が見える。この山稜はインドとネパールの国境を走り、パルット（一八八六呎）においてシッキムとの三国の境界点となり更に巔々北上し、カプルー（二四〇〇二呎）を経てカンチンジャング（二八、一四六呎）主峰にまで連つてゐる。ダーシリンの街は既に四哩先の眼下に見渡せ、カンチンジャング連峰が二万呎の氷壁を遙か後方に聳立させてゐるのを一望の下に望める。ただしこれは好天に恵まれた時のことで、よちよち登つて行く列車がゲームの駅を過ぎ、突然この大観を眼にする印象は、誰しも忘れ得ないものである。そしてダーシリンの人となれば、この大観はいつも眼前に横わつてゐるのだ。

× × ×

先日、帝劇でシネマを観たら丁度この登山鉄道の場面がうつつてゐた。カーシオンの駅からの出発が始まりだつたが、路線に象が昼寝をしてゐたり、それを追払つてゐるうちに列車が逆行暴走して、六十哩のスピードで観客をひやひやさせるなど仲々芝居がかつてゐるが、面白かつた。本当だつたら何処かのループで脱線崖下に転落してしまうであらう。私も今度の旅行で、割に平なつまらぬ個所で一列車転落して崖の途中にひつかつてゐるのを自動車から見た。ちよくちよくこんな事故はあるらしい。この路線が開通

したこの頃は、野生の象や虎が時々出没したという話だが、シネマもそんな話にヒントを得ての象の出演となつたのだらう。

× × ×

この鉄道は、一八七八年、当時インドで最高の權威を持つてゐた東印度商會のフランクリン・プレスタージという人に依つて企劃され、ベンガル政府の協賛を得てダーシリン・ヒマラヤ鐵道会社が一八八一年に完成した。最初の軌条は二呎巾で、積載貨物は七屯。傾斜は急な所で二十分の一、平均二十九分の一。そしてシリグリー、ダーシリン間五十一哩の総工費一七五万ルピーだつたといふ。八十年前の話にしても随分安かつたものである。あんな未開の奥地のジャングルを切り拓き、七千呎の高所まで鐵道を通じさせたのもさすがは英國である。しかしその英國の勢力も今は完全にインドから駆逐されて、ダーシリンの街にも英國人の姿を昔のように見かけられないのは何となく寂しい。歴史はどんどん變つてゆく。

ダーシリンへのドライブ

私の乗つた飛行機は、カルカッタから一時間五十分ベンガルの空を飛び、三時半にはボグドグラの狭い飛行場に到着してしまつた。東ベンガル鐵道の終着駅には自動車で十分程の所である。汽車なら二十時間余もかかるのだからまことにあつけない。

予約した大型の車が待つてゐた。ネパールのらしい運転手が早速やつてきて、御迷惑でなければ学生が一人バスがないので困つてゐるから途中まで乗せてやつてく

れないかとの申し出だ。どうせ大きな車を独り占めなので差支えないといふ間もなく一人の青年を連れてきて私に挨拶をさせ、運転台に乗り込ませた。見ると、カル

クタから同じ飛行機に乗つてゐた、紺のブレザー・コートにグレイのフランネル・ズボンの学生である。そしてホッケーのスティックにオールド（インド旅行によく使われる寝具一切を入れるズツク製の鞆）をかかえてゐる。坐席が広いが私の方へ来ないかと奨めると遠慮しながら私の隣へやつてきて腰を下ろした。私としても話相手がい方が退屈もしないからかえつてその方が好かつたのだ。バスに乗るつもりでゐた処生憎見つからず閉口してゐた処なので助かつたといふことである。私としても、奮発して一台予約しておいて好かつたわけで、それにこの青年を途中まで乗せていつてやれ好意を示せたことを喜んだ。所が、話をしているうちに、青年は運転手からも千円程とられてゐるとのこと、親切な顔をしていた運ちゃんも仲々早いことやるわいと感心した。インドではこんなことは日常茶飯事なので驚きはないが、青年に見えた学生も話をしているうちに、私の仲の高校生と同じ位の年頃の少年で、カーシオンのヴィクトリア・コレッジにケンブリッジ・シニアの資格をとるため暫く寄宿舎に入るのだといふ。

英國人のような顔をしてゐるので色々聞いてみると御父さんはパキスタン（チタゴン）に働いてゐるとのこと国籍はパキスタンだ

というが恐らく英國人の血が入つてゐるのだらうと想像された。

少年相手に地理の話、歴史の話等をお交しているうちに車は平原の森林帯を離れて山路にかり、登山鐵道に沿つて登り始める。私がこの前自動車でこの道を通つたのは一九二八年だから二十九年前のことになる。が、道の状態はその当時と余り變つてはなないようである。箱根の山道をドライブしているような気分だが、谷や山のスケールが大大大きい。

カーシオンに着いた時はもう四辺も薄暗く、駅や街の店屋には灯がともつてゐた。少年は車を下り苦力に荷物を担がせ、さよならを繰返しながら急な坂道を登つて行つた。

霧が急に濃くなつてきた。街を出はすれど十米先も見えない程になつた。道の片側は絶えず深い谷に切れ込んでゐるので余り好い気持はしない。車はスピードをぐんと落して手探りのような具合で進む。突然霧の中に姿を現わす登山列車に驚く。汽車の方はレールの上を走つてゆくから谷へ落ちる心配はないだらう。乗り換えとなる衝動に駆られる。

大分寒くなつてきたが、車の中で毛の下着を重ね着してゐたので助かつた。腹の方はカルカッタのホテルで軽い朝食を摂つただけなので相当空腹を感じ始めたが空港で買った塩味のビスケットとチョコレイトがポケットに忍ばせてあつたのが役に立つ。

そんな濃霧の中を車は漸く最高地点ゲームの部落に辿り着いた。カンチンジャンが山群が始めて見え

る岩の切り通しを過ぎり、下りにかかる額から好い具合に霧は少し宛薄れ始め、時たまダーシリンの街の灯がちらちら見え始めてはつとした。車は緩い大きなカーヴを切る。と漸く稍々真直ぐな本通りに出てホテル・マウント・エヴェレストの石段の下に着いた。丁度ボグドグラから三時間許りかつたわけだが、こんな濃霧の中のドライブとしては大分早目に着けたものだ。（つづく）

アルプスと高原

日本山岳会監修

題名がきわめてロマンチックなので、山の随想集とでもまちがえられそうだが、これは登山のガイド・ブックである。北アルプス、御岳、白山、中央アルプス、南アルプス、八ヶ岳と蓼科、霧ヶ峰と美ヶ原、頸城山群、上信國境の山と高原、上越國境、日光、尾瀬、那須岳、奥秩父と多摩の山、富士山、丹沢山の各篇にわかれ、それぞれ主要な一般コースについて本会役員が分担執筆してゐる。現在のところ山登りの参考資料としては最も信用のおけるものである。附録として主要駅までの時間と運賃、私鉄バス案内がのつてゐるのも便利である。（Y）

昭和三十二年四月三十日日本交通公社発行、二二〇頁、写真二

寄附金

▽貳千円也 藤田 佳宏殿
▽壹千円也 朝日新聞社殿
▽壹千貳百円也 富田治三郎殿

ブラバンド氏歓迎会

来日したサミュエル・ブラバンド氏の歓迎会が四月二十四日午後六時から国際文化会館で開かれ盛会であった。席上同氏は次の挨拶を行った。

会長殿、親愛なる友人ならびに山仲間たち、尊敬する淑女紳士の皆様。日本山岳会はこの集りでご挨拶するに際して私の何をさておいての目的は、すべての皆様がたに心からの謝意を申上げることでありませう。私は皆様方の美しい故国でとても感謝を言葉ではあら

この三月日本橋の三越でひらかれた池大雅（一七二三—一七七六）歿後百八十年記念作品展は、書画とて百数十点の逸品ぞろい、大作小品とりどりに観者を驚かし、せてくれた。その一つ、三岳記行屏風は、山好きの足をとめずにはおかない。それは八双の白地屏風に貼られた、多分美濃紙を横二つ折りにしたと思われる大きなものに書かれ、旅の覚え書きと二十三葉の見取り図のほか道中会計の覚えをしるし全部で四十一枚、表紙と跋文のおのおの二葉も添えてある。

大雅はすでに寛延元年（一七四八）二十六才のとき富士山にのぼり、翌年立山と白山に遊んで、三岳と号を改めたほどであるが、その翌年ふたたび白山にのぼり、宝暦十年（一七六〇）には友人の篆刻家高芙蓉、韓大年（天寿）と三人づれで白山と立山をたずね、さらに浅間山にのぼって江戸に出

わすことは出来ないほどの多くの榮譽と好意と友情に恵まれた。好意ともてなしは早くも東京に上陸した第一日に始つたのです。横、松方、別宮博士、山崎教授、藤島諸氏の歓迎はまことに暖かいもので、私はこの国にきたことの瞬間から自分の家にいる気持ちにつつまれました。実際私は見知らぬ国にきたものではなかつたのです。私が日本で見、味わった事柄のすべては、私が何事かを通じて前々から旧知のことだつたのです。しかしそれを現実味に味わつてみると、想像していたよりも遙かにそれは美しいものでした。私は以前お目に

で、再度富士登山を試みて京都に帰つた。そのときの覚え書きがこれであつて、表紙右半面の中央に「三岳記行」とし、右肩に朱字で小さく「立山浅間」とあつて左下に四角な印が二つ、左半面に「立山」と横書きしてあり、裏表紙には「韓」の一字が署されてゐる。他の一葉には「大雅堂道之記表紙画共」「韓天寿表紙裏共」「高芙蓉筆記」「各真蹟也」「三子旅行」「雅趣如見」「今尚存矣」「珍重々々」「右筆ノ件証之」とあつて丸い印が二つ捺してある（もつともこの作者は大雅といふことになつてゐるが異説があり、表紙裏に署名してゐる韓大年の筆になるものらしいという説のほうが正しいようだと教えてくれた人がある）。この他に「此小冊子ハ大雅大年芙蓉三翁記行雜記也云々」とあつて、これをもらつた三好汝生から欧斎に

かかつたこともない多くの日本の方々とも知り会ひになつたのです。ところがその際にも、一度ですら未知の人とお会いしてゐる気持にはなりません。思うに心の底から出てくる日本人の真情こそは、世界に類をみないものだと思ひます。

この異国での三週間に、私が本當に打ちくつるごとの出来たのは、勿論、なにをさておいて、私の親愛なる友人たちに謝すべきものでありましよう。この中、多くの方々は、私は二十五年から三十年もお目にかからなかつたのです。私達は皆年老いたけれども、

池大雅の三岳記行

与え、さらに慶応三年秋椿斎に贈られたという由来を書いた一葉がある。筆者のあやし気な解読力でおまけにガラス越しとては、なかなか読みこねなかつたから誤読があるかも知れない。

記行のところは途中の地名と里程を入れてあり、その間に見取り図がはさまれ、葦崎寺から見た景二葉、立山図（室室辺から仰いだ雄山「本社」から「劔岳」にいたる連峰二葉）外山、野尻湖（俯瞰図）、戸隠山（別当勧進所、気丘石室など）、浅間岳（追分側）、浅間山からのパノラマ四葉、阿珂溜山図などで、よく真をとらえジツと眺めてゐると興味深々たるものがある。

どの友人も一向に変わらないように見えるのです。たとえば、その典形である横さんをとりつてみましよう。ミツテルレギ尾根、マウン・アルバータ、マナスルに出かけた彼は世界の偉大なアルピニストに数えられるにもかかわらず、私が一九一九年に同じく知じとなつた當時と全く同じ謙譲で物静かな人に止まどつていました。

横さんについて、私の脳裡にこびりつてゐるひとつの情景があります。夕暮の小屋の前で、日本人だけが持つあの小器用な手つきでパイプに煙草をつめながら腰を下ろし、無言で偉大な山の世界に

泊、八十四文糸立三枚、四十文米一升二合、二十四文たい松三本、八十五文申食、二十文西瓜（たびたび食べてゐる）、九百七十七文室堂（七月十二日は大風雨のため一日閉ぢこめられてゐる）、一貫二百十二文山銭別山廻り等立山室堂入用、五文あめ、十一文おこし、六十六文サイ川舟渡、六十六文チクマ川舟渡、六十四文せんたく物三人、二十四文さいせんなど當時のさまがしのばれて面白い。この屏風は京都博物館に寄託されてゐるのだというから、だれかゆつくり本文を読んで見られたら、さらに興味ふかいものがあると思われる。

ちなみに表紙（右半）と浅間岳図追分傍面、立山図（右側）、阿珂溜山図、越後妙高山の諸図は展覧会の図録にのせてある。

（日高記）

図書寄贈（敬称略）

アルプスと高原 日本交通公社
雪岳探検記 村木 庸益
登高行十五号 慶大山岳部
山に開く 藤島 敏男
山登り 渡辺 公平
山に憑かれた男 加藤喜一郎
ヒマラヤ登攀史 岩波書店
登山の基礎 山崎 安治
ヒマラヤ 望月 達夫
会報十四号 日大山岳部
北海道高山脈 早大山岳部

白馬鑓ヶ岳 遭難報告

明大山岳部

①春山合宿と第一次遭難

昭和三十一年度春山合宿は杓子尾根を中心とする白馬、鑓ヶ岳の東面に選り、新人の総仕上げ並に二年部員以上の強化を目的とし二月二十五日より約一ヶ月猿倉にベースキャンプを設けて合宿というプランであった。

滑り出しは順調で、三月三日に第一キャンプを上双子岩（一八〇〇米）に設け、翌四日に第二キャンプを頂上直下二七〇〇米附近に設営した。

ここで準備態勢は整い新人は高所キャンプに入り荒井賢太郎（三年）、佐藤深和（二年）の二名は第一キャンプより鑓ヶ岳東面の北稜の登攀を行うことになった。

当初の計画から、登攀パーティは、一切のサポートを求めず自力で遂行することになっており、そのため食糧、装備も一人二分とビバークの用意とその心構は持っていた。また積雪季の後立山の各支稜は現在の当部の上級部員の實力と衡量して、極めて困難とは考えられず、また敢えて危険を冒そうとする程の無思慮な者はいなかった。春の好天をねらえば、全く快適な登攀の行える場所である。

三月八日。正午頃、佐藤はアプ

ザイレンの最中、原因不明のまま墜落、左手首骨折の負傷を負った。スキー場であつたら、記事にもならぬ位の程度であつた。同行の荒井も第二次の雪崩で埋り、また荒井の報告を詳細に聞いた救援隊のリーダー五十嵐（OB）も今は他界してしまつた。僅かに残つた五十嵐の遺品のノートから佐藤遭難の様を記して見る。

「この日（八日）未明の天候は、星が白みかけた空に幾つと数えられる程で、上の方であつた。午前五時出発、六時には北稜末端から約五十米程登る。これは第二キャンプの本隊から認められる一ノ九時頃本隊の内二名が第一キャンプに逆ボツカに下つた際、北稜の約三分の一程登つてゐるのを認め互にヤッホーを掛け合い、お互いに励み合つた。以降次第に天候が悪くなり、ガスが時々北稜を捲き、雪がチラ／＼と降り出した。ラッセルは可成りあり、時間は掛つたが、北稜は、岩、ブッシュ、深雪と、技術的にはそれ程困難でなくアルパイトの問題だけだつた。

第二の突起に到達した時、天候は急速に悪化して来たので今日は一且第一キャンプに帰ることにし三十米のザイル（ナイロン）を用いて下降する。今日は偵察のつもりで行動を起したとのことであつた。

第一回、二回と木や岩をピンにして下降。（北稜を中央ルンゼ寄りの側面）第三回目にハーケンを二本打ちこれに拾繩をかけ、これをピンにして荒井を降下する。荒井下降したので佐藤に合図、ほんの暫らくして、荒井の目の前にザイル

が滑つて落ちて行きハツとする間に雪煙を上げ佐藤墜落（約百米）荒井も心の平静を失ひ、足場の不安定なためにスリッパし約六十米落ちる。彼は怪我はなく独り立ち上り、ロープを取りに行こうとしたが、佐藤が下の方で立上るのを見て、そこまで下る。佐藤の気は確かであつたが、ショックで気は立つてゐるようであつたが、煙草が喫いたいといつて一服した。どうして落ちたかさつぱり分らないと彼はいつていたさうである。

荒井は肩をかし佐藤を下したが、左手首の骨折を知り、そのうち、足の痛みを訴え、どうやら足も打つて痛めたらしい。ラッセルが深く思ふように進めぬし、雪崩の危険もあるもので、一刻も早く安全地帯へと退避するよう努力し大きな岳樺が四本ある台地へと佐藤を運び、ここで彼を待たせ、第一キャンプに連絡とエンピを取りに行く。

ところが不幸なことに、荒井はガスのために方向が判然とせず雪庇より、杓子沢に落ち、目鏡、磁石を失う。後の捜査で判明したが荒井の目鏡は佐藤のいた岳樺の附近で発見されてゐる。ガスのためというより、近視の彼が、最初から目鏡なしで歩いて落ちたのであつた。荒井はここで、第一キャンプへ行くのをあきらめ、一時間程して佐藤の処に戻り、ピッケルを使い簡単な雪洞を掘り、食糧四日分、携燃四ヶ、セーター、ヤッケ、マッチ等を置き、南股を下つて、二股へ連絡に下る。午後一時三十分

その日遅く、午後八時三十分南

股取入口に仮泊する。どうしてこの危険な南股の谷を下つたか今は知る術もない。大きな六左衛門の滝の音を右後ろに聞いたということは分つてゐるが、それにしても全く無事に下つたというのは不思議でならない。

翌九日、取入より発電所へ。午前七時三十分。ここから電話で、白馬町役場・細野案内人組合と大町警察署へ、更に警察から東京神田警察署より明大体育課へと午後一時半頃に連絡がとれた。

東京本部へは未だニュースが来ぬうち新聞社から問合せがあり、直ちに大町警察署に問合せたところ、今朝細野ガイドが十一名現地に引き、遅くとも今夕に細野部落まで引下せる予定であるし、負傷も大したことはないといふので、その報告をう呑みしたため、すつかり安心し、一まず救援隊（といふより、東京へつれて帰る附添いの意味で）を五十嵐他二名を夜行で発せる。他は待機して、五十嵐の報告でいつでも出動出来る態勢を整えていた。

十日正午、細野よりの定時連絡で、現地は全く天候悪く、予定は立たぬ、といふので大塚他六名出発する。

一方荒井は九日電話連絡の後二股で細野救援隊の到着と待つが、なかなか来ないので一人で猿倉に入り、居合せた千葉大学山岳部員二名の応援を得て、本隊へ連絡をとるため、午後二時出発するも天候悪くこの日は千葉大キャンプに泊る。そして翌十日も天候悪く、本隊の連絡はとれず空しく上双子尾根から引返す。

十一日。風雪。

◎救援隊の五十嵐パーティ及びガイド連は猿倉より双子岩の千葉大キャンプに到着（前八時三十分）
◎荒井、千葉大の混成救援隊は二手に分れ、荒井、他千大二名は佐藤雪洞現場へ、他の千葉大二名は明大本隊への連絡と活発に動いたが、何れも悪天に阻れ、目的は達せられなかつた。

五十嵐、荒井の両パーティは三白平附近で合流し搜索を続けるがガイド一行は雪崩を心配して三白平より引返す。

天候は益々悪く、友のことは気になるが如何ともなし難く、僅かに棚藁岩の頭から遠く、佐藤雪洞の大きな岳樺を認めただけで空しく引返す（午後四時）

◎一方本隊は下山中、上双子岩附近で連絡に上つた千葉大生と会い事情を知り、一応本隊を猿倉に下山させ、上級生二名、双子岩に連絡に来る。

◎東京よりの救援本隊は夕刻猿倉に入り、直ちに現地ガイドより情報を聞くも、誰一人荒井に会つておらず、また天候が悪かつたため歩いておらず新しいことは何一つ分らなかつた。そこで、OB二名を連絡に双子キャンプに行かせ五十嵐へ慎重な行動をとるよう指示し、情報を取つて来させる。真暗のなかを下つて来た話によると、五十嵐パーティは本日の搜索で大体佐藤の現場と思ひい処を認めたし、明日は天候さえ良ければ早朝に出発するといふことであつた。更に下山した学生の詳細な報告で事件の概要は前述した通りの状況であることが判明した。

コースになつてゐる。

明確なことは判明しないが、ツイていない時は、全く、いろいろなこと、悪く悪く重なるものだと思つた。

何れにしても、不運な三重遭難であつた。(大塚記)

今年のヒマラヤ

望月 達夫

今年のブレ・モンズン期のヒマラヤ登山も終つたようだから、日本の新聞によるニュースをひろつて一応まとめてみよう。

まず第一の成功はブロード・ピーク(八〇五一米)の初登頂である。ブロード・ピークといえはかつてそのための小委員会も出来た(会報一四九号参照)くらいだし

近くは京大探検隊がもたらした映画会カラコラムに、遺憾なくその雄姿がうつされたのだから、とりわけわれわれの印象にも強く残つてゐる巨峰である。登頂されたのは六月九日で、マルクス・シュムックを隊長とするオーストリア隊、一行中にはナンガ・パルバート単独登頂で有名なヘルマン・ブルムも加わつてゐた。それで未登の八千米峰はダウラギリ、ガシヤールブルム第一峰、ゴサインターンの三座だけとなつた。

つぎはヒマラヤのヴェテラン、ロバート少佐を隊長とするイギリス隊のマチャプチャリ(六九九七米)登頂である(六月二日)。登頂隊員のW・ノイスとD・コックスの二人は、神聖な絶頂には足をのせないという現地人との約束を守り、頂上下約四五米の地点から引

返してゐるが、カンチェンジュンガの場合と同様に、登頂したものと同様に、登頂したものと認められてゐる由である。

同じイギリス隊でチャールズ・エヴァンズ博士を隊長とする登山隊は、アンナプルナ第二峰(六九三七米)を目指し、五月の第一週には登頂か、とも伝えられていたが、後報が今だに無いところをみると、成功はしなかつた模様である。なお、この隊は英人二名、シエルバ四名の極めて小人数の隊であつたという。

マシヤールブルム(七八二二米)に挑んだマンチエスターの登山隊(隊長ウォームズリー他四名)は七月上旬猛吹雪におそわれ、頂上攻撃の日時は目下のところ不明と報ぜられてゐる。

最後にヒマラヤからはいさゝか離れたが、中国辺境のミニヤ・ゴンカー(七五九〇米)に中共の登山隊が登頂したことを付け加えよう。登頂は六月十三日、隊長史占春は一九五六年七月にソヴェトの登山隊と協力して、ムズターグ・アータ(七四三三米)の登頂にも成功してゐる経験者。ミニヤ・ゴンカーは一九三二年十月にアメリカの小パーティによつて初登頂された山で、今度は二度目にあたるわけだが、そんなに容易な山ではない筈である。今まで中共の登山界の実状が不明だつたから正確なことはいえないにしても、この成功は特筆に値するものと思われ。ただ不運にも下降の際高度六八〇〇米付近で猛吹雪に遭ひ三人の隊員を失つてゐるのだが、これらの事故の原因が、功をあげるの余り、登山の基礎訓練の不足と

いうことになつたならば幸いである。

中国辺境にはミニヤ・ゴンカーの他にも、まだまだ未登の山々が多い(五〜六十米級)のだから、わが国からの遠征といふことも必ずしも夢のような話ではないであらう。

ブロード・ピークの登頂 ヘルマン・ブールの死

RAWALPINDI, PAKISTAN, JUNE 29 (AP)—THE AUSTRIAN KARAKORAM EXPEDITION HAS CONQUERED THE 26,550-FOOT BROAD PEAK IN THE KARAKORUM RANGE OF THE HIMALAYAS, ACCORDING TO A REPORT RECEIVED HERE SATURDAY.

A MESSAGE RECEIVED HERE FROM SUKARDU SAID ALL THE MEMBERS REACHED THE PEAK TOGETHER ON JUNE 9.

THE MESSAGE SAID THE PARTY IS AWAITING ARRIVAL OF POTERS TO RETURN TO SKARDU.

THE EXPEDITION LEADER IS MARCUS SCHEMUCK, AND ITS OTHER MEMBERS HERMANN BUHL, FRITZ WINTER-STEELER AND KURT DIEM-BERGER.

A PAKISTAN ARMY OFFICER, CAPTAIN QADAR SAIED, IS ACCOMPANYING THE EXPEDITION.

NEW DELHI, JULY 16 (AP)—

HERMANN BUHL, MEMBER OF THE SUCCESSFUL AUSTRIAN HIMALAYAN EXPEDITION TO KARAKORAM, DIED JUNE 27 AS THE RESULT OF A FALL FROM A HEIGHT OF 1,000 FEET THE TIMES OF INDIA REPORTED TUESDAY.

THE SIX-MAN AUSTRIAN TEAM STOOD ON TOP OF KARAKORAM JUNE 9 AND BUHL'S DEATH 18 DAYS LATER HAPPENED WHILE ATTEMPTING CHEQUILISA PEAK IN THE BALTORE GLACIER REGION.

THE TIMES OF INDIA REPORTS FROM LAHORE, QUOTING SOURCES FROM SKARDU, SAID BUHL'S BODY HAS NOT BEEN RECOVERED YET.

THE REPORT SAID THE OTHER FIVE MEMBERS OF THE TEAM, INCLUDING ONE PAKISTAN ARMY OFFICER, HAVE RETURNED SAFELY TO SKARDU. THEY ARE EXPECTED IN RAWALPINDI WEDNESDAY.

五十年後

KARAKORAM IS SITUATED ON THE PAKISTAN SIDE OF THE HIMALAYAS.

図書紹介

ヒマラヤ登攀史

深田 久 弥著

深田さんは昨夏、「ヒマラヤ——山と人」と題する好著を出された(会報一八八号)。本書は右の内容の一部をさらに煮つめ、またその後の記録をも加えて、ヒマラヤ八千米峰の登山史を、山の専門的な知識をもたない一般の人々にも解り易く説いたものである。

記述の順序は登頂された年代順に並んでゐるので、第一章は一九五〇年に初登頂された最初の八千米峰、アンナプルナからはじまるのだが、その前に「なぜヒマラヤに登るか」の序章があり、そこにヒマラヤの地理的概観も巧みにこめられてゐる。また八千米峰の一覧表がかゝげられてゐることも親切である。ついで第二章はエヴェレスト、ナンガ・パルバートが第三章という具合に進められて、わが日本のマナスルは第八章にあたつてゐる。

本書の一つの特長であり、またおそろしく著者が苦心された点とも思われるのは、各章毎にその山の登山史を述べるだけでなく、その時々にあるいは登山の方法、装備の進歩を述べ、あるいは酸素使用の問題、高度馴化、シエルパのこ等を興味深く述べてゐることである。したがつて最初から通読すると、八千米峰の登山のありさまばかりでなく、およそヒ

マラヤの登山で今まで問題とされた大部分の事柄が事例のなかにうまく融けこんで容易に読者の頭になかへ入ってくるのである。かなり長い年月を万遍なくヒマラヤの文献に取り組み、丹念にノートされた著者のような人にして、はじめて可能のことと思われる。また「文学的虚心を犠牲にしても記述の正確を期した」とあとがきで著者自ら述べているように、記述も正確である。

私一個の好みかも知れないが、本書からさらに詳しいことを知りたい人々のために、各章末に原文献のうち邦訳されたものだけでなく、挙げておいたれば親切だつたと思う。また書名は副題の「八千メートルの山々」だけにした方が内容にピッタリしたのではなからうか。とまれ、海外でもこれだけ豊富な新しい内容を、これだけ簡潔に、平易に述べたヒマラヤ本はまだ現われていないのだから、著者の労を多とすると同時に、多くの人々に読まれることを希望する。

(望月)

一九五七年七月岩波書店発行 岩波新書二一四頁 折込地図一葉 写真図版多数 百円

山 登り (準備と技術)

渡 辺 公 平 著

山登りは生涯をかけて完成するスポーツであると説く著者が、その長い経験から述べた初心者むきの山登りの解説書である。四章にわかれ、第一章山登りの準備、第二章山登りのための技術、第三章山登りの研究、第四章愛される山々となつており、附録に山登りの

用語説明がついている。「この本はこれから山登りを始めようとする人々や、山登りを始めてまだ間もないという多くの人々の入門書として、山の登り方、山での暮し方についてやさしい解説を試みたものである」と著者は述べている通り、登山の技術書といふ従来実際にはそれほど必要ではない足場切りだとか、ハーケンの使用法だとかに重点が置かれたものが多かっただけに、この著は登山入門書としてはまことに打つてつきのものだ。第四章の若い人びとのためのプラン十二選もまた親切な山の案内である。(Y)

昭和三十二年五月三十日社会思想研究会出版部発行、定価百円

岩 登り 教室

海 野 治 良 著

写真による岩登り技術の入門書である。「岩登り、それは登山という行為から生れるすべての精神的、肉体的の苦しみや、悦びや楽しさをさらに力強く、端的にしたものなのである。それはより高くより困難な登攀へと導びかれてゆくアルピニズムの大きな流れの一分流なのである。岩に登ることが登山のすべてではない。いかに岩に登ること自体が若い心を燃えあがらせ、湧き立たせようとも、それは高い頂きへの一つの路であることを知らねばならない」と著者はまえがきの中ではつぎいっている。岩登りの歴史、岩登りの心がまえ、道具、服装、岩の登り方、ザイルの結び方、確保法、隔時登攀、連続登攀、さらにハーケン、カラビナー、アプミの使用法まで

著者の長年のうんちくをかたむけてくわしく述べられている。岩登りをテーマとした写真集としてもまた興味深く、巻末の三ノ窓チンネのマイナー・ピークの写真など見事である。(Y)

昭和三十二年七月一日山と溪谷社発行、一〇四頁、定価一八〇円。

登 山 の 基 礎

山 崎 安 治 共 著
金 坂 一 郎 著

学生を対象としたアカデミックな登山教科書としてまことに充実した内容を盛つた力作である。登山の技術書は昔から色々出版されておき、戦後のもこの数年來文字通り、戦後のタケノコのように各種の技術書(もちろん日本語の)が店頭に並べられているが、正直にいつて自分の後輩の学生たちにこれを読めと積極的にすすめるものは一つもなかった。その点、学校教育の重要な一端を担なっているという面から登山をとあげ、非常に正確な技術指導を展開されている本書は、たんに学生のみでなく広く一般の登山者にも是非一読をすすめたい。特に最近地方の高校の山岳部あたりで、大学山岳部(といつてもピンからキリまであるわけだが)と張りあつて無茶な計画が行われているようなので、高校生の登山のあり方という面にも一応あてられている本書は、その教科書として大きな役割をはたすことである。(O)

昭和三十三年六月十五日朋文堂発行、一八九頁、写真四葉、定価二〇〇円

慣習と伝統の遷移

沼 井 鉄 太 郎

「登山者はその初心のうちには山の急斜面の見掛けに無関心では有り得なくてその心理的垂直線は大部分斜に寝ているが、山特に岩に熟達していくとそれは真の鉛直線に近づいていくつて終には全く一致するようになる。これは水野祥太郎氏著「岩登り術」に日本ではじめて指摘された事柄を筆者の解釈する言葉としたものが、ここにいわゆる心理的垂直線の遷移はまた同書説く所の登山における慣習律の変遷でもある。即ち初心登攀者の平面的体位の慣習性が岩登りの練習によつて熟練者の立体的な技術慣習と化することを示している。さて、榮あるマナスル登頂の連年の経験知識の内でも最も教えられたものの一つに隊員辰沼博士の言があつた。それは海拔六、七千米の高さ以上になれば登山者とも早常態の人体でない、いわば病人である、その感覚行動は勿論、その物の考え方まで常規で簡単に律せられない場合がある、というようない意味であつた。故にこの表現を重んずれば、最後最高の登頂をした者及びそれに匹敵する行動をした者は、平面的健康の強さをヒマラヤの高度まで持ち来したというよりは、寧ろ一般高山病者中最も早く病態調節適応に成功して高度立体的な慣習に遷移することが出来たといつてもよかつた。

話は日常の生活と登山にかへつてみよう。人が身につけた慣習というものは、打ち破るべく意外に

も頑固である。卑近な所でわれわれは日常起床すればまず歯磨を使い洗面しなければ朝の食事をとらない慣習である。ところが吹雪く冬山の幕営でもそのために乏しい融雪水を使ったが人を中心のみならずヴェラン級にさえ見ることがある。灯がつかないといつた慣習も山小屋などでは困つたものである。その他例証は驚くべき程沢山あるが、要するに山に行つたら山に向かないような生活慣習は改めた方がよい。しかし新方式に一変してしまおうと思つても人間の性格慣性は当初は頗るデリケートな可逆体系にあるので、これはどうしても理智と経験と更に善意のある団体訓練によつて能率的に新しく身につけなければならぬ。すぐれたリーダーと強い組織とよい伝統のある学校山岳部の部員などが、忽ち立体的な慣習を取り入れて優秀な登山家となり易いのは個人的登山では得られない大きな記録経験を含めて実に団体訓練による所が多いようだ。

但し登山団体の内には麻薬の習慣性を与えるのではないかと疑われもする位極端は日常及び登山訓練をしているものもないともいえない。この行き過ぎを警戒するためには団体は時々個性の尊重に還元して見直すがよいと思ふ。自分達の伝統的に行き方は化石化してやしないが、外により発展方法、研究部面がありはしないか考へてもよい。団体としての伝統はこゝでは団体としての慣習(簡別的散漫でない全有機的なもの)と考へたい。

団体慣習即ち伝統を遷移してよかつた例では、この四月来日したレビュフ氏等フランス隊が一九五〇年アンナブルナ登山に成功し人類始めての八千米以上を印したのが最も輝かしい。いうまでもなく従来の合理的慎重なオーストリア登山からラッッシュ・タクチックに切りかえて見事登頂、ヒマラヤ登山界に新しい息吹を与えたのであつた。このフランス式速攻形式はわが国でも信奉者が少くない。本年三・四月宇奈月から僧ヶ岳、毛勝山を経て御岳に至る長大な尾根の全行程に成功した法政大学山岳部も第四キャンプ以後はラッッシュ法によつたと日刊スポーツは報じている。

要するに個人の慣習、登山隊の常用形式伝統は時によつて遷移して然るべきこともあると知るのである。(一九五七・四・一三)



通信

スイスだより

今井友之助

出発以来丁度一カ月、ボルドーとシャムパーニュの視察をすまして、チューリッヒ経由で昨日こ

へ来ました。夕方早速ケーブルカーで、近くのスタンスホルンという一九〇一米の山に登り、雲の中に氷河のある山を初めて眺め、雪だけのあとに咲き出したクロッカスの写真をとつたりして、チョーピリ山頂の気分を味わいました。二十三日ロータリーの総会をすませてから、天気がよければユングフラウヨッホまで登り、七月十五日ごろまでは、またブドウ酒行脚の旅を続けます。

そのあと二三週間山旅が出来るようなプランを、去る十五日フランス山岳会を訪ねて、フレンド氏に依頼しておきました。

言葉も通貨も英仏独混合で用を足しているような始末です。

五月十九日
(スイス・スタンスタット)

神津島の天上山

古沢肇

伊豆七島の神津島を見物するといふ団体の募集があつて、東京港から直航の船が出るというので参加した。六月一日午後七時、竹芝桟橋出帆、同二日払暁五時に神津島へ着いた。

東京から南西に四十四里、一晚中エンジンの響きを枕に聞いたせいか、かなり遠くまで来たような気がした。四面切り立つたような峻しい島の西岸に少しばかりの平坦地があつて集落が見える。小さな港には漁船がいくつか、天草を採る道具(名を聞いたが忘れた)が干してあるのが目につく。日曜日だというのに村長さん以下、村役場の方々総出の歓迎であ

る。朝食少憩の後、天上山(五七四・二米)へと案内される。天上山は死火山で、島の最高峰であるが、伊豆諸島の山としては尻から三番目で決して高い方ではない。そんなわけで恐らく段々島の半島とくらしいに思つていたが、案に相違して海辺から仰いだ姿も堂々として、全体が高山的なのに驚いた。

冬の西風が強いせいか、山頂を掩う松や蘆薈が全て倭松となつて、恰も道松のようである。山頂は広く、大小十数個の旧噴火口があり、それが岩石ばかりの砂礫帯になつたり、清冽な水を湛えた幾つかの池塘になつたりして頗る変化が多く、なんとなく北アルプスの奥の方を歩いているような錯覚を感じさせられた。

島ではこんなに多勢の観光客を迎えたのははじめてとのこと、頂上の不動尊祠の池の傍で女子青年会の娘さん(アネさん)達が、態々、伊勢音頭を踊つてみせてくれた。天気は高曇りで、時々小雨に見舞われたが風はなく、八丈を除いて、島々の展望も申分なかつた。

帰りは別の道を下山し、永浜、多幸湾を見物したが、多幸湾の雄大さには心を打たれた。天上山の大絶壁が真逆さまに海に落込んで裾を波に洗われているさまは、三陸の茂師も及ばないくらいだ。こんな風景が交通不便ということだけで、まだ残されているのは惜しいようでもあり、嬉しいことでもあつた。(三二・六・三)

在米だより

佐々保雄

小生メキシコに一月(ポボとオリザバは遙かに眺め、いまパロサンゼルスに五カ月、いまパレクレイに来ております。時折り学内でも山の集りがあり顔を出しております。先日はマカルに行つたモコウストンに会いました。今夏はシエラクラブの二週間の山登りに参加の予定(沼井氏あて)

谷川岳のこと

山本元

谷川岳の登山取締りの法制化運動を群馬岳連が起すことになつた、という新聞報道記事を読んで唖然としたのはびっくりではなかつたらう。

登山ブームに乗つて、観光熱にうかされて数多くの登山コースを切開いたのは地元の人達ではなかつたのか。パンフレットをたくさんばらまいておいて今になつて「法制化」とは一体どういう料簡なんだろう。観光地への客寄せのように入道をすれば登山の知識の少ない人達が大量やつてくることは、あたりまえのことである。山が近くなつた今日のごとの現状ではパトロールを増員して、それらの人達へ正しい山登りの指導をする以外には遭難の予防対策はないではないか。これとても余り感心したことではないが。

ぼく達がさかんに登山に熱中した頃は、丁度戦中戦後の静かな山の頃であつたせいもあるが、丹沢

や三ツ峠での岩登りで書物から得た技術を自己のものとして、自信を持つてからでなければ一ノ倉は勿論、谷川岳の各沢を登攀する資格が無いものだと思つていたものだ。丹沢一峠―谷川の三角コースをやりながら除々にレベルの高いルートへと、なかば恐れをいだきつつ、それだけに大きな期待を持つて出掛けたものである。

「魔の谷川岳」というジャーナリズムの宣伝がきいて「谷川岳だけは行きたくない」という人達がまだまだ多くいることも知つている。「法制化」などという自分で自分達の首をしめるような愚にもつかないことを考えることなどはやめて一層のこと小屋を取り払い、指導標を取り去り、径の切り開きなどもやめて、大自然の太古の姿に還元してしまつた方が、むしろスッキリしていいのではなからうか。

(六・二五)

会務報告

六月役員総会十九日(水)

△場所 本会図書室

△出席者 日高副会長、理事小原

金坂、太田、村木、折井、田島

石坂、羽鳥、大塚、山崎、評議

員渡辺、望月、成瀬、監事石原

津田関西支部長、高山信濃支部

長

議事および報告

△ウエストン祭および上高地ダム

の件、ウエストン祭は七月七日に

行うことにした。上高地ダムは中

止となりダムは奈川渡あたりに持

つていくことになった。(高山)

△山日記の件、十二月一日発行を

目標にやっている。編集について

は検討したい。(徳久)

△山岳の件、石井画伯から表紙の

画がもらえたので近日中に出せる

△無線通信の件、理事会でとりあ

げマナスルで使用した器具を活用

し遭難救助に役立てたい。

△高体連山岳部の件、第一回の登

山を大峰山でやるが、山岳会とし

て異論はない。ただし各競技団体

では高校の全国組織は体協に加盟

しているそれぞれの公認競技団体

の下部組織となつているので高体

連山岳部も日本山岳会の下部組

織としてやるべきである。したが

つて日本山岳会に加盟するという

条件のもとにこれを認める。

七月役員総会 十七日(水)

△場所 本会図書室

△出席者 日高、松方副会長、理

事辰沼、小原、金坂、折井、石

坂、松丸、村木、山崎、評議員

成瀬、渡辺、望月

議事および報告

△ウエストン祭の件 (渡辺)

△北九州支部発会の件、七月二日

戸畑市で北九州支部発会式をあげ

支部長に岡田喜一氏が選任され

た。なお模範名誉会員が発会式に列

席した。(折井)

△ランジャールの件、厚生省国立公

園管理課から依頼あり、支部長会

議にはかり会の態度をきめたい。

(辰沼)

△寄贈 会員松尾清秀氏よりマナ

スル登頂一周年に日本放送で放送

した記念特集録音テープが寄贈さ

れた。

訂正 一九二二年会務報告中図書

基金寄附日本勧業銀行よりとある

は興業銀行の誤りにつきおわびい

たします。

ネパール政府新登山規則に対する追加規定

昨年九月十四日付ネパール政府の新登山規則に対する追加規定(本年二月二十二日付)がこのほどネパール大使館より外務省あて送付されてきた。この追加規定はマラヤ登山の場合の山の高さによるロイヤリティの区別、リエゾンオフィサー、およびポーター死亡の際の補償金額、その他ネパール政府に対する登山資料、ニュースの提出、コピーライトなどを追加規定するものである。

February 22, 1957

Supplementary note to the
New Mountaineering
Regulations of the Govern-

ent of Nepal September 14, 1956

1. Rules (i) to (v) quite clear.

2. Rule (vi). A brief report

regarding the Expedition

should be submitted to the

Government of Nepal before

the Expedition has left

Nepal and a detailed report

should also be submitted

to the Government of Nepal

within 6 months of the re-

turn of the expedition and

before its publication.

3. Rules (vii) to (ix) are quite

clear.

4. The party shall pay compe-

nsation to the infured or

family of the deceased, as

the circumstances may be.

if any of the porters or

liaison officer lose their life

or limb during the expedi-

tion. Pending introduction

of life insurance scheme for

them, the party shall, for

the present, pay a compensa-

tory amount of Rs. 5000/-

(Nepalese Currency) and Rs.

2000/- (Nepalese Currency)

for the death of every liaison

officer and porter respecti-

vely. The rates of com-

penstation for loss of limb

etc during the expedition

will be worked out on a

detailed scale later on.

5. Rule (xi) A representative

collection of specimens of

materials collected during

the expedition must be

presented to the Govern-

ment of Nepal prior to the

departure of the Expedition

from Nepal, and copies of

every photograph which is

to be published must be

presented to the Nepalese

Government before publica-

tion.

6. Rule (xii). Royalty would.

be calculated on the follo-

wing scale:- (a) For an

expedition to Dhaulagiri,

Everest, Lhotse, Makalu,

Cho-Oyu Manaslu, Kanchen-

unga, Annapurna, Rs. 3,000.

-. (Indian Currency) (b) For

an expedition to a mountain

over 25,000 feet high, not

included in the above Rs.

2,000.- (Indian Currency).

(c) For an expedition to a

mountain below 25,000 feet

in height Rs. 1,000.- (Indi-

an Currency).

These royalties will be

payable irrespective of the

size of the Expedition itse-

lf, and should be paid in

Indian currency to the

Ministry of Foreign Affairs

on arrival in Kathmandu

before the Expedition sets

off. In the case of scientific

expeditions, the royalty

would be Rs. 1,000.-.

(Indian currency) for an

expedition of 4 persons and

above, and Rs. 500 for a

smaller expedition.

7. Rule (xiii) there will be no

copy-right of the General

news of the expedition (i.e.

news of success, failure,

accident) by one press or

newspaper, special news

such as feature articles and

personal reports will howe-

ver be free. The Govern-

ment of Nepal must get all

the news about success,

failure or accident before

the publication of this news

anywhere else.

8. Rule (xiv) is quite clear.

MINISTRY OF FOREIGN

AFFAIRS,

GOVERNMENT OF

NEPAL, KATHMANDU.

編集後記 会報の編集を引うけてから早くも満二年たつた。その間途中臨時に一号出して都合十三冊の会報を出した勘定になる。引きうけた当時は少しはひまもあつたので、かなり余裕を持つてやれたが、最近はお金がまわっていかしく、いきおい手がまわりかねることもあつて申しわけなく思つてゐる。どなたかこのまことに手数のかかる、しかも重大な仕事を買つて出てはくださるまいか。(山崎)

昭和三十二年七月廿五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

社団法人 日本山岳会

発行所 編集者 山崎 安治

価額二十円 電話神田(三)八九五二番

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂御池五番地

印刷所 株式会社 技報堂